幼児期の社会性の発達と保育（その2）

— 幼児期の仲間関係と養育方針の関連 —

川瀬良美 長谷川和世 五嶋香織 鈴木美紀 金子 保
 (日本女子大学) (大巖寺幼稚園) (淑徳大学)

〈目的〉

本報告は、幼児期の社会性の発達を仲間関係と保育の関連から検討することを目的とした一連の研究の第2報である。第48回大会では第1報として、幼児自身の自己認知から仲間関係のソシオメトリーを作成し、結果について被選択数から検討した。その結果、園の保育方針である友達の良い面を認め合うクラスづくりが生かされ、3人～4人の小グループが相互に関連をもちながらクラス全体のまとまり構成しているという幼児期の仲間関係として成熟した関係が成立していることが認められた。また関連変数としてコミュニケーション能力としての関係理解力が仲間関係の発達に関連することを明らかにした。更に、担任教諭による被選択数の多い子どもの特性の評価では、生活習慣が自立していることが共通点として指摘された。基本的な生活習慣が自立していることにより、園生活において余裕が生まれ他児への援助や配慮が多くなり、他児から仲間として認知される結果をもたらしていると考えられることができる。そこで本研究では、仲間関係の発達と生活習慣の自立及び幼児期の行動特性の関連について、親の養育方針から検討する。

〈方法〉

1. 対象：幼稚園年長児1クラス28名（男児15名，女児13名，平均年齢5歳8ヶ月（標準偏差 3.77））。
2. 仲間関係調査
個別面接法により、一緒に遊ぶ友達について5名まで回答を求めた。
3. 養育方針調査：対象児の保護者に、生活習慣の自立及び行動特性について、養育方針としてどの程度重要視しているか5段階による評価を求め、また何歳くらいまでに達成させたいかについて目標とする年齢をそれぞれの項目について記入してもらった。

〈結果と考察〉

（1）仲間関係調査：被選択数

仲間関係の指標としての被選択数を表1に示す。

表1より、被選択数は0人から7人まで分布しているが、最も頻度が高かったのは4人（28.6%）で、最も頻度が低かったのは7人（3.6%）であった。

性別にみると、被選択数7人は男児のみ1名であったが、その他性別による顕著な傾向は読みとれない。

表1 被選択数の分布（単位：人）（%）

被選択数	全体	男児	女児
0	2 (7.1)	1 (6.7)	1 (7.7)
1	3 (10.7)	2 (13.3)	1 (7.7)
2	5 (17.9)	3 (20.3)	2 (15.4)
3	3 (10.7)	1 (6.7)	2 (15.4)
4	8 (28.6)	3 (20.0)	5 (38.5)
5	3 (10.9)	2 (13.3)	1 (7.7)
6	3 (10.9)	2 (13.3)	1 (7.7)
7	1 (3.6)	1 (6.7)	0 (7.7)
合計	28 (100)	15 (100)	13 (100)

（2）被選択数の高低群別の選別

被選択数の上位25%を高群，下位25%を下位群とし高低群を選定し群別に平均値を算出した。結果を表2に示す。また生活年齢に差があるか検討するため高低群別に平均値を算出し表2の右欄に併せて示す。

表2より、高群に選定された者は7名で、低群に選定された者は10名であった。t検定により、高低群別による被選択数の平均値の有意差が確認された。また生活年齢は、標準偏差に相違がみられるが平均値に有意差は示されず、第1報で生活年齢は仲間関係発達の規定要因とはならないとした結果を支持している。

表2 高低群別の平均値 () 内標準偏差

	被選択数	生活年齢
高群 (7名)	5.71人(.76)	69.3ヶ月(3.35)
低群 (10名)	1.30人(.82)	69.4ヶ月(2.12)
t検定結果	t=11.24 df=15	t=.09 df=15
有意水準	p<.001	p<.1

（3）養育方針調査

養育方針の項目の選定にあたっては、幼児期の生活習慣の自立と行動特性について、先行研究により妥当であると思われる生活習慣の自立についての6項目と行動特性についての7項目を筆者らが選定した（項目内容は表3参照）。重要度並びに達成目標年齢のそれ

それについて全体及び高低群別の平均値を表3に示す。

1. 養育方針の重要度の認知

表3より、生活習慣の自立並びに行動特性の中で、「食欲のある子」がやや低い平均値であるがその他は概ね4点以上で、これらの事項を養育方針として重要視していることが示されている。中でも、「自分のことは自分でできる子」という自立の項目と「健康な子」という生活の基本項目が最も高い平均値を示している。

高低群別に重要度をみると、高群の平均値は全ての項目について低群より高く、その中でも7項目は有意差が示され、高群の親は養育方針として生活習慣の自立と幼児期の行動特性について低群の親より重要であると認知していると言える。中でも、「寝る時間・起きる時間がきちんとしている子」「物事の準備がきちんとしてできる子」「先生へわたす提出物など忘れない子」という社会生活としての幼稚園生活での適応に関連した項目に有意差が示されている。また高群の親は、「行動的な子」「外で元気に遊ぶ子」「明朗活発な子」という行動特性についても低群の親より重要と考えていることが示されている。

2. 達成目標年齢

達成目標年齢は、全体では「健康な子」が最も低く(M=3.04)、「整理整頓ができる子」が最も高く(M=5.57)目標とする年齢に2歳以上の開きが見られるが、いずれの項目についても6歳以前の幼児期に達成され

ることが目標とされている。

高低群別では、項目によって目標とされる年齢に相違があるが、生活習慣の自立に関連した項目は高群が低い年齢での達成が目標とされ、行動特性については低群が低い年齢での達成が目標とされていることが読みとれるが有意差は示されなかった。

《結語》

幼児期の仲間関係の発達に生活習慣の自立が関連しているかについて、親が認知する養育方針から検討したところ、多くの子どもから一緒に遊ぶ仲間と認知されていた子どもの親は、基本的な生活習慣の自立を重要視し、しかも早い時期に達成することを目標としていた。親のこのような認知が子どもの達成を促進することを示唆する結果である。また生活習慣が自立していることは園生活での余裕をもたらす他児への援助や配慮が多くなり、他児から仲間として認知されたのであろうとする指摘への肯定的結果といえる。この結果から生活習慣の自立は、日常生活を円滑にすすめる上で重要であるのみならず、幼児の社会性の発達にも効果的に機能することが示唆される。生活習慣の自立が仲間関係の発達に寄与したとする本研究の結果は、親の養育方針としての重要度の認知による効果と、幼稚園の保育目標としてのお互いの良いところを認め合う指導により培われた園児相互の信頼関係を基礎として示された結果とみることができよう。

表3 養育方針の重要度と達成目標年齢の、全体並びに高低群別の平均値 ()内標準偏差

	重要度(5段階評定)			達成目標年齢(自由記述:歳)		
	全体(N=28)	高群(N=7)	低群(N=10)	全体(N=28)	高群(N=7)	低群(N=10)
歯みがきをきちんとする子	4.25(1.38)	4.71(.49)	> 3.60(2.01)	3.96(1.84)	3.57(1.81)	< 4.20(2.39)
寝る時間・起きる時間がきちんとしている子	4.14(1.38)	4.86(.38)	> 3.30(1.83)*	4.11(1.95)	3.86(2.12)	< 4.00(2.40)
物事の準備がきちんとしてできる子	3.96(1.40)	4.86(.38)	> 3.10(1.66)**	5.36(2.09)	4.86(1.35)	< 5.10(3.11)
自分のことは自分でできる子	4.43(1.37)	5.00(.00)	> 3.90(2.08)	5.00(2.62)	4.57(2.44)	< 4.60(3.84)
整理整頓ができる子	4.04(1.40)	4.43(.79)	> 3.30(1.95)	5.57(2.83)	5.14(2.54)	< 5.30(4.19)
先生へわたす提出物など忘れない子	4.18(1.47)	5.00(.00)	> 3.30(1.83)*	4.86(2.30)	4.86(1.35)	> 4.30(3.37)
食欲がある子	3.75(1.38)	4.71(.49)	> 2.80(1.69)**	3.86(2.68)	3.29(2.29)	> 3.00(2.79)
偏食のない子	3.93(1.36)	4.29(1.11)	> 3.30(1.83)	4.29(2.42)	3.86(2.34)	> 3.40(2.59)
行動的な子	4.04(1.35)	4.71(.49)	> 3.20(1.81)*	4.61(2.28)	4.86(1.35)	> 3.60(3.24)
外で元気に遊ぶ子	4.29(1.33)	4.86(.38)	> 3.30(1.83)*	3.79(1.81)	3.57(.53)	> 3.30(2.58)
友達が多い子	4.07(1.39)	4.71(.49)	> 3.40(2.01)	4.69(2.07)	5.00(1.63)	> 3.50(2.64)
健康な子	4.43(1.37)	5.00(.00)	> 3.70(2.06)	3.04(2.49)	2.71(2.36)	< 3.20(2.90)
明朗活発な子	4.18(1.36)	4.86(.38)	> 3.30(1.89)*	4.79(2.59)	4.29(1.38)	> 4.10(3.21)

注1:表の上部6項目が生活習慣の自立の項目,下部7項目が行動特性の項目

注2:不等号記号は平均値の大小関係を示す

注3:低群の右肩に付したアスタリスクは、高低群別によるt検定の有意水準を示す。* P<.05, ** P<.01.